JISS Bulletin

一般社団法人スウェーデン社会研究所　所報　第 378 号

出典：ウィキメディア・コモンズ（Wikimedia Commons）

【スウェーデンの点描】日本・スウェーデン国交 150 周年

18 世紀に『日本植物誌』を著したカール・ペーテル・トゥンベリをはじめ、江戸時代にも日本を訪れたスウェーデン人はいましたが、日本とスウェーデンとの間で修好通商航海条約が結ばれ、両国の間で正式な国交が結ばれたのは明治改元からわずか 19 日後の 1868 年 11 月 11 日でした。

それからおよそ 4 年半後の 1873 年 4 月 24 日に欧米諸国を歴訪していた岩倉使節団がストックホルムを訪れ、国王オスカル２世に拝謁したのが、日本人がスウェーデンを訪れた最初の記録となりました。

それから 150 年を経た現在、毎年５万人近くのスウェーデン人が日本を訪れ、４万人以上の日本人がスウェーデンを訪れています。昨年末に日本とＥＵの間で経済連携協定（ＥＰＡ）交渉が妥結しましたが、同協定の締結によって、両国の関係が今後ますます発展することが期待されます。

※巻末の書評もあわせてご覧ください。

【2017 年 10 月研究講座】
「スウェーデンの教育：これからの日瑞の教育交流を考える」

① モータラ市での研修について

宮城学院女子大学　伊藤　亜弥さん
森川恵理子さん

こんにちは。私たちは 8 月 20 日から 9 月 12 日の約三週間の間スウェーデンのモータラ市のプリスクールにおいて研修を行ってきました。

現地では、アウトドア教育に力を入れている施設で子ども達と遊んだり、プリスクールのカリキュラムに参加をしたりして、多くの時間を過ごしました。自然を利用した丸太の遊具やアトリエ用の小屋など特徴的な施設も多く見受けられました。また、年齢によって保育室の外観も異なっていました。

また、様々な遊具が充実していたことに加えて、子どもたちが遊んでいる際、誤って飲み込んでも大丈夫な素材が使われている粘土が用意されていたり、洋服が濡れた際に乾燥機が使えたりと、子どもへの気遣いが感じられる一面もありました。さらに、アラビア語で書かれた図解カードもあり、移民の子どもたちへの配慮も見受けられました。

日本の保育施設との違いは大きく四つあります。一つ目は、先生一人当たりの子どもの割合が少ないことです。先生の負担は減り、子どもたち一人一人へのケアが行き届きやすくなっています。二つ目は、アウトドアでの活動を重視していることです。外に出て自然の中で過ごすことで、自発的に遊ぶことを学びます。三つ目は異なるバックグラウンドを持つ子どもに対する配慮です。言語や文化の違いでなじめない子を無くすために、アラビア語をもちいたものを教室内に用意されていたのが印象的でした。四つ目は、食事の多様な選択肢についてです。宗教の関係で食べられないものがあったときや、ベジタリアンの子どものために、特定の食べ物を使用していない食事も用意されていました。

この研修では、以上のようなスウェーデンの幼児教育を間近に感じることができました。この経験を、これからの活動に活かしていけたらと思っています。

② スウェーデンのアウトドア教育

宮城学院女子大学　西浦和樹教授

私からは、今回のテーマでもあるスウェーデンの教育の中でも、アウトドア教育に焦点を当ててお話しさせていただこうと思います。

まずプリスクールの目的は、価値観を育むことが重視されています。話し合いの基礎、つまり民主主義の基礎になる、合意形

成の基礎を育てることでもあります。

スウェーデンにおけるアウトドア教育は、ただ単にキャンピングを教えるために行っているわけではありません。森にある松ぼっくりや植物の葉の付き方などから、黄金角について学ぶなど、実際の体験を通じて、数学さえ学習できることを子どもたちに伝えています。

またアウトドア教育の視察として訪れたリンショーピン大学の研修では貴重な体験をすることができました。まず現地にて、研修前のチームビルディングとして、キャンプ体験に参加しました。そこでは声を出さずにあるメッセージを伝えるなど、なかなか日本ではできない体験をしました。

その後、研修に参加して実践視察を行いました。先生が子どもたちと焚き火をしながらヴァイキングの歴史を語りかけていたのは、とても印象的なシーンでした。また、火がなかなかつけることができない子どもに対しては、先生たちが粘り強く、点くまで見守るなど、様々なことを間近で見ることができました。またアウトドア教育には、社会生活上の生活習慣の確立に効果があることがわかりました。

園によっても活動の特色があり、使っている機材や遊具も違っていました。防音素材を教室内に使っていたり、吸音素材を使ったりする施設もありました。発達障害の子たちにも先生の指示がしっかり耳に届くようにする配慮も見られました。

次に、私が研修をしていたモータラ市について紹介させていただきます。同市は市として人を育てるというチャレンジを掲げており、教育水準、企業家精神、若者の失業率、そして移民難民対応に力を入れています。この四つに焦点を当てれば、税収も上がると考えているようです。

同市ではエコツーリズムの一環として「水」をキーワードとするリゾート開発が、デンマークの企業の投資のもとで計画されています。また「超自然」という社名で、コテージを提供している会社もあります。

このようなスウェーデンのエコツーリズムの共通点として、精神的な健康を得るために重要な、個人の成長や社会への貢献が感じられる活動が提供されています。

まとめとして、アウトドア教育に期待される効果として、子どもと教師の健康促進、子どものストレス軽減、子どもの集中力の軽減、そして仲間との協働の機会の提供が挙げられていました。

最後に、日瑞国交樹立 150 周年を迎え、今後の発展に向けて、ワークライフバランスやウェルビーイング、そして民主主義における合意形成の仕組み等の価値観を取り入れるために、教育関係者の人事交流がより必要とされていくべきであるということを強調して結びとします。ありがとうございました。

③ スウェーデンの起業家精神教育

東海大学名誉教授　川崎一彦先生

皆様こんにちは。まずは、記念すべき第200 回目の JISS 講座にお招きいただきまして誠にありがとうございます。私からは、スウェーデンにおける起業家精神教育についてお話しさせていただきたいと思います。

スウェーデンにおける起業家精神教育の定義はフィンランドからの発想を取り入れています。それは“外的起業家精神”と“内的起業家精神”に分けられます。前者は、すでにあるサービスを生産し付加価値を生み出すこと。後者は、創造的で勇気があることを示しています。またフィンランドの教育省は起業家精神を「アイデアを行動に翻訳する個人の能力」と定義してされており、起業家精神教育が教育において大きな意味を持っていることがわかります。

文明の歴史的変化を四つに分けると、狩猟から始まり、農業、工業が続き、現在は「知業」の時代と言えます。しかしながら、この時代を迎えている中で、日本の教育の問題点として、内容の詰め込みや競争を重視しすぎるという面があります。

これからの教育では、答えがないかもしれない、答えが複数存在しうる、そして、自分で問題を発見する力が必要とされていきます。まさにこの知業時代における教育は、創造性や柔軟性がさらに重視され、さらに言うと、知っているだけではなく、知識がある上で何ができるのかが求められるというわけであります。

さてスウェーデンのプレスクールや小中学校の指導要領を見てもらうと、起業家精神という言葉が実際に記載されています。「大人は子どもが信頼感と自信を持つように支援すべきである。子どもたちの好奇心、**起業家精神**、そして興味を励まし、学ぶ意欲と意思を刺激すべきである。」このように、小さい頃から、起業するということが身近に感じられる環境にあるわけです。

ヘルシングボリにある学校は、一つのビジョンとして「ワクワクする学校」というテーマを掲げています。特に、ヘルシングボリのセントヨルゲンプレスクールでは「子どもの一番好きな場所への関係」「子どもの公共の場所への関係」というテーマが教育に大きな意味を持っています。これについては、静岡県私立幼稚園振興協会からスウェーデンに派遣され、ヘルシングボリにて研修を行われた、大石先生と田村先生にお話をいただきたいと思います。

最後に、日瑞交流１５０周年を迎えるに当たり、これからさらなる教育に関する交流を深めるために、創造性や空想性を刺激するようなイベントを開催できたらなと思っております。ご静聴ありがとうございました。

④ スウェーデンの幼児教育に触れて

静岡聖光幼稚園副園長　大石竜士先生

私たちは、スウェーデンのヘルシンボリで研修を行ってきました。私からは「本物で遊ぶ教育」というテーマでお話しさせていただきます。

まず、私が現地で驚いたことは、美術館と幼稚園のコラボレーションで作られたオブジェが町の中にあることでした。「自分の言葉が自分の意見として取り入れられる」ということがまさに実践されていました。子どもたちが「街にあったらいいな」と思い想像したものが、形となって街の中にあるというのは、強く印象に残りました。

また海岸での野外活動の際、子どもたちが海岸で見つけてきたごみを実際に、自分たちの目で判断し分別をさせるという場面もあり、「実際に子どもにやらせてみる」ということの重要さも感じました。私も日本に戻ってきてから、子ども達がこおろぎを見つけた際に、何を食べると思う？と聞いてみたり、実際に子どもたちに調べてもらったりと、現地で学んだことを生かせることができました。

IT 教育におきましては、教室内にプログラミングを学ぶおもちゃがあり、アイパッドも備え付けられていました。まだ子どもではありますが、何かを与える側であるという認識を持たせる目的が感じられ、デジタルなものや触れられるもののコラボもいたるところに見受けられました。

この研修から、子どもが想像したものが目に見える形に現れることがいかに現地での幼児教育に役立っているのかということを深く理解することができました。

⑤ ヘルシンボリでの研修について

追分幼稚園園長　田村都弥先生

私も、大石先生と同様、ヘルシンボリの保育施設にて研修を行ってきました。現地での研修を経て、実際に感じたことを中心にお話しさせていただきたいと思います。

まず、本当に人が優しいなという印象を持ちました。どこへ行くのにも、現地の方が優しく接してくださりました。ヘルシンボリの皆様の優しさで素晴らしい日々を送ることができました。

ヘルシンボリ市では「ワクワク」「創造」「グローバルバランス」の三つのキーワードがテーマとなってまちづくりに生かされています。特に「グローバルバランス」に関しては、研修を行った保育施設で実践されているのを観ることができました。課外活動で森や原っぱに行った際に、子ども達が木の枝などを持って帰ってきま

すよね。そうした時、次にまたそこを訪れる際に、前回に持って帰ってきたものを返しに行くということを行っていました。このことには大変驚かされました。自然活動の中でも「グローバルバランス」という言葉が、まさに示されていました。

また、教室内にはイマジネーションルームという場所がありまして、そこの壁に貼ってある QR コードを読み取ると、ユーチューブでお母さんの読み聞かせを見ることができるというものにも出会いました。外国からやってきた子ども達でも、母国語でお母さんの声が聞けるということで、細かいところまで配慮がなされているなと感じました。

現地では素晴らしい時間を過ごすことができました。この経験をぜひ次へとつなげていけたらと思っております。ありがとうございました。

［記録：明治大学国際日本学部 3 年
稲田　亘平］

【2017 年 12 月研究講座】川上玲子　フォルム SKR スカンディックハウス代表、北欧建築・デザイン協会会長
「 スウェーデンのライフスタイルとデザインの魅力」

今回お話を頂いたのはインテリアデザイナーの川上さん。スウェーデンやその他、北欧諸国のデザインに関して主に取り上げていただきました。

【川上さんの紹介】

学校卒業後、前川國男さんの事務所にアシスタントデザイナーとして就職。その後、パートナーと共にスウェーデンへ渡り、現地の美術大学に留学。テキスタイルを中心に学びました。現在はインテリアデザイナーをしながら大学非講師を務めています。

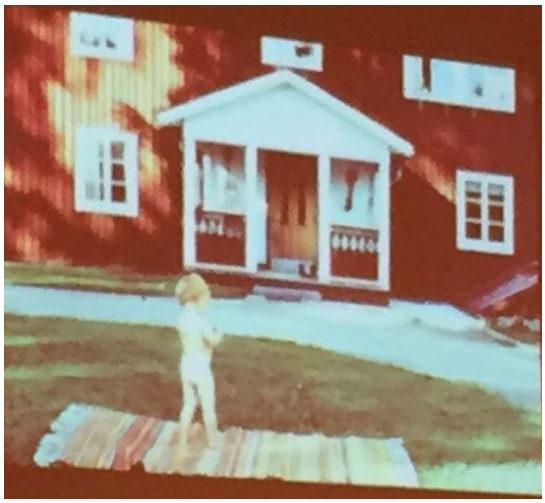
【なぜスウェーデンなのか】

前川設計事務所へ入所した当初から、将来的に北欧へデザインの勉強をしに行きたいと考えており、特に家具デザインにおいて先進的であったデンマークに留学を希望していました。前川氏からは、日本で出来ないことをやるべきだと助言されました。

また前川設計事務所が旧スウェーデン大使館と公邸を設計した縁で、大使館を見る機会があり、全ての要因が包括的に考えられたデザインに衝撃を受けました。さらに上野の文化会館の設計に携わった際に、男性中心の建築部署とは異なり、色彩や質感には女性の観点が求められると実感したことで、テキスタイルデザインにも注目し始めました。

その後、スウェーデンの美術学校に直接連絡を取り、入学前に自分でテキスタイルの基本を習得することを前提に承認を得ました。このように北欧、デンマークからスウェーデンの生活に溶け込んだデザインへと関心を広げていきました。

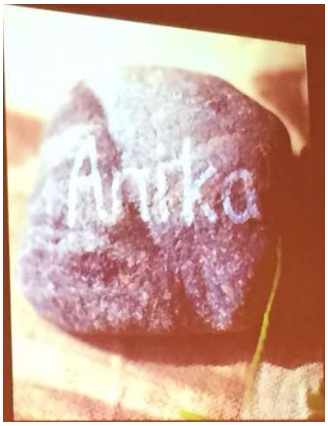
【スウェーデンデザインの特徴】



・ 子どもが外で遊ぶ際は、手作りのござを敷きます。ビニールシートを利用する人はまずいません。以前、スウェーデンの友人が来日し、お花見のブルーシートを使用することに衝撃を受けていました。幼い頃から手作りのいいものに触れる環境が整っています。

・ スウェーデン人は夏にサマーハウスへ拠点を移し、天気が良ければ一日外で過ごすこともあります。もちろんテーブルクロスも布の手作りです。使うごとに毎回洗濯に出します。また夏の明るい時間帯でもろうそくは欠かせません。

・ スウェーデンデザイナー曰く、デザインの基礎は「自然」から来ます。人間の頭の中で考えつかないような美しい色など、刺激を与えてくれます。

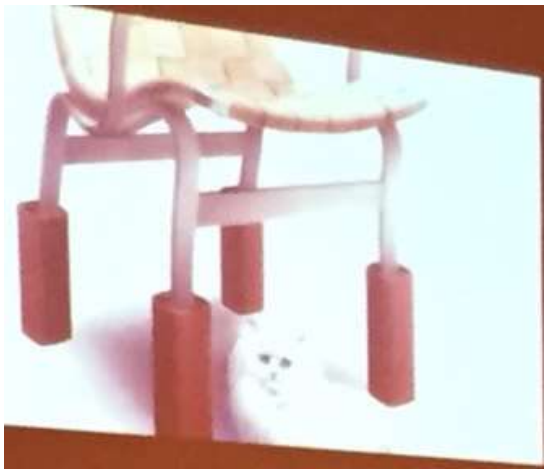


・ スウェーデン人はパーティーにおいて席順を気にかけます。たとえば子どもの誕生日会では、石に参加者の名前を書いて席札がわりに使用します。クリスマスにはジンジャークッキーを利用します。

・ グスタビアンスタイル－グスタフ三世がフランスの華やかな宮殿に影響されて確立したデザインを指します。有名なモデルがこのデザインで統一された自宅を建てたことで広まりました。以前、西武百貨店でデザイナー数名が様々な地域の特性を活かしたインテリアショールームを作成した際に北欧を担当し、このグスタビアンスタイルを設置しま

した。モダンなデザインが中心なので、古いスタイルを置くべきでないとも言われましたが、「機能的であるより心がホッとするインテリア」の必要性を信じていました。

・ スウェーデンは他の欧米と比較して裕福でなかったため、ロココスタイルも質素に抑えられました。



・ スウェーデンのデザインは、健常者と身障者、若者と老人、一般住宅とオフィスの間で差別をつけません。デザインの良い同一の椅子を、カバー等の付属品をつけることによってカスタマイズしています。

・ スウェーデンには、公共建造物を新築する際に費用の１％をアートに使うという規則があります。他にも無名のアーティストが個展を開けば、著名なデザイナーが見にくるなど、需要が大きい環境にあります。

・ 地下鉄の駅は「地下鉄ミュージアム」と称されるほど、アーティスティックです。各駅でデザインもテーマも大きく異なります。新しい駅の開発のために、日本から視察団が来ることもあります。

・ スーパーマーケットでもデザインにこだわりがあります。たとえば商品陳列において、ナッツの色を揃えて陳列したりします。

・ また写真のように異なる商品、素材、製造元でも「ピンク」なら同じ色を使用します。そのため同じ色を集めれば街中や部屋の中が非常に統一されます。日本でよく耳にする「部屋の統一感がない」という悩みを抱く心配がありません。何を選んでもセンス良く完成されます。ただし、これは逆に個性がないと言うこともできます。

・ このように自宅でも素材の違いを楽しむ白が好まれて使われています。

・ 一般家庭でもデザインに細やかな配慮があり、友人の男性は、お皿の使い方や食器とクロスの合わせ方にまでこだわっています。派手な花柄とシックなストライプを合わせるなど、奇抜なデザインでも周囲の組み合わせによってオーガナイズします。
・ 初めて訪ねる家では、（もちろん一定の仲の良さが前提ですが）全部屋を周り、インテリアや部屋構造の話をするのが礼儀です。
・ ろうそくを多用します。少し前のスウェーデンではパーティーから 0 時前に帰宅するのは良くないと考えられており、開始から添加して終了時刻まで保つ長さのろうそくを用意し、時間の目安にしていました。

・ 手作りを大切にしており、手間暇をかけて一つ一つ作ります。クリスマスのオーナメントも手作りで、派手なものはありませんが素朴な温かみやホッとするデザインになっています。

日本とスウェーデンは互いに影響し合う点が多く、特に陶器にその様子が見られます。もちろん全く同じではなく、彼らの感性に基づく「日本らしい」ものです。その感覚は昔から続いていて、民族博物館などに行くと織物や陶器など、非常に似ている作品が多いです。住まい方でも、派手なものではなく、本当に良いものを揃える点などが類似しています。

【スウェーデンスタイルまとめ】

日本と似ている点も多いスウェーデンのデザインですが、「一部でなくトータルで考えられている」「手作りを大切にする」「自然の色や素材を生かす」など、こだわりがより強いのがスウェーデンの特徴と言えるでしょう。

［記録：明治大学国際日本学部３年
中村　みなみ］

【2018 年１月研究講座】明治大学国際日本学部　鈴木賢志ゼミ「ＬＧＢＴ（性的少数者）をめぐる課題－日本とスウェーデンの現状と比較分析から学ぶ」

今回で７期目となる明治大学国際日本学部　鈴木賢志ゼミの卒業生は、わが国のＬＧＢＴ（性的少数者）をめぐる課題について、５つのテーマで日本とスウェーデンの現状を明らかにし、その比較分析を通じて学んだことを発表しました。

①「同性愛に対する意識は何に影響されるのか」

国際社会調査プログラムの「同性愛への賛否」の結果を基に、なぜ両国で態度の違いが出るのか、年齢、教育水準、宗教、政治の４つの観点に分け考察を進めました。

［年齢］

スウェーデンは同性愛に寛容な国というイメージがありますが、意外と賛否がはっきりしており、世代が上がるにつれ、否定的な態度をとる人もある程度います。

逆に日本は、同性愛に対して不寛容なイメージがありますが、若い世代の絶対肯定の割合はスウェーデンとほぼ変わりません。ただしスウェーデンと比べると、全体的に絶対肯定の割合がかなり低くなっています。

［教育］

日本は教育水準が高い人ほど同性愛に対して寛容な傾向が見られるものの、スウェーデンと比較するといまだに否定的です。日本人の意識を変えるにはまず教育水準の高い人から変える必要があり、その意味で大学の積極的な取り組みが求められます。

［宗教］

スウェーデンは国民の大半がプロテスタントではあるものの、その宗教観に囚われず、さらに多様な宗教を敬う姿勢があるため、同性愛に対しても比較的寛容です。

［政治］

スウェーデンの国家主義者の中には、ＬＧＢＴに寛容な人々が存在します。逆に、ＬＧＢＴに寛容でない社会主義者もいます。他方、スウェーデンのＬＧＢＴコミュニティーによる政党選択は、一般のスウェーデン人とほぼ変わりません。つまり日本のように「保守はＬＧＢＴに対する寛容度が低く、リベラルはＬＧＢＴに対する寛容度が高い」という態度は、スウェーデンには当てはまらないようです。

② 「スウェーデンにおけるＬＧＢＴの法制度－何が制度をつくったのか」

私たちは、スウェーデンでＬＧＢＴに関する法制度が発展した背景について調査・考察しました。今回対象としたのは、(1)同性婚関連法、(2)性転換手術合法化、(3)強制不妊手術撤廃の３つです。

(1) 同性婚関連法

同性愛行為は 1944 年に非犯罪化されました。世界では 23 か国目であり、フランス革命以降、欧州並びに欧州の植民地で進んでいた非犯罪化の波に乗ったと考えられます。1995 年に登録制パートナーシップ制度が制定されましたが、こちらも北欧理事会加盟国を含め近隣国家がスウェーデンに先立って同制度を立ち上げています。この動きの時代背景として、1980 年代にＨＩＶが拡大し、同性パートナーの病院での面会や、遺産の相続を保障する制度が無かったことが挙げられます。2009 年には同性婚法が制定されました。2005 年には性的少数者の権利を保護するモントリオール宣言が出されています。このように、スウェーデンにおける同性間の関係に関する法律は、他国に続く形を取る、あるいは関係国との決定に基づいて作られたと考えられます。

(2) 性転換手術合法化

1972 年、スウェーデンは世界で初めて性転換手術を合法化しましたが、未婚でなくてはならない、不妊手術を受け生殖能力を無くすなどの条件がありました。これは劣等とされる遺伝子は残さないという優生学の考えに基づいています。ただしこうした差別的な条件は課せられたものの、世界で初めて性転換手術自体を合法化するという革新的な動きに至ったのは当時の首相、オロフ・パロメによるところが大きいと考えられます。彼はスウェーデン社会労働党の政治家で、福祉政策の充実、女性の地位向上、アメリカ軍のベトナム戦争での虐殺を批判するなど当時から革新的な政治家として注目されていました。

(3)強制不妊手術撤廃

2013 年の強制不妊時手術撤廃に大きな影響を与えたのは、2005 年のモントリオール宣言と欧州評議会です。この宣言は 2005 年の第 17 回世界性科学会議で出され、「すべての人々の『性の権利』を認識し、促進し、保証し、保護する」と述べています。これを受けて翌年発行されたジョグジャカルタ原則では「ホルモン治療を強制されない」など、より具体的な法的基準が示されました。なお、当時の欧州評議会ではスウェーデンの人権委員 Thomas Hammarberg が強制不妊手術の撤廃を勧告しています。

結論として、ＬＧＢＴの人権を保障しようという国内外の動きを受けた結果として、政府主導でＬＧＢＴの人権を保護する法律が制定されたと考えられます。政府主導というと非民主主義的な印象を受けますが、民主主義国家からだからこそ少数者の権利に関しては政府主導の動きが求められたのではないかと推察されます。

③ 「ＬＧＢＴとメディアーメディアがつくりだすＬＧＢＴのイメージ」

私たちは「日本とスウェーデンのメディアにおけるＬＧＢＴの取り上げ方の違い」という問題を提起しました。そしてこの問題提起に対して、「日本のメディアではスウェーデンのメディアに比べてＬＧＢＴを特別視するような風潮がある」という仮説を立てました。つまり「ＬＧＢＴの人々は身近にいて、私達と何も変わらない存在である」という取り上げ方ではなく、「自分たちとは異なる存在を楽しむ」や「笑いの対象」または、「困っている、可哀想」「助けなければいけない人々」といった取り上げ方をされている、ということです。他方、スウェーデンでは、ＬＧＢＴに対する個人の好き嫌いはともかく、彼らを特別な存在として切り離すのではなく、平等な存在としてインクルードしているのではないかと考えました。この仮説を検証すべく、主にＴＶ番組で、オネエタレントや同性愛が「笑いのネタ」として扱われる傾向があることと、ＬＧＢＴネタに対する非当事者の過剰反応の２つがあることを明らかにしました。

まず「笑いのネタ」としてのメディアの取り上げ方について、今日のオネエタレントの台頭で、ゲイやバイセクシュアルなどのセクシュアリティや、トランスジェンダーという存在の認知や受容に繋がっているというのも事実であるとした一方で、「ゲイ＝オネエ」という偏ったイメージばかりが強調されていることを指摘しました。そして、日本では自分とは異なる存在（ＬＧＢＴの人々）を、明らかに自分とは異なった特徴を持つ「オネエ」という枠組みに納めつつ笑いの対象とすることで、その存在を受け入れている傾向があるのではないかと結論づけました。

続いて、オネエタレントのメディア露出が目立つ一方で、芸能人の同性愛疑惑を「娯楽として消費する」ような報道のされ方について考察しました。また 2015 年の一橋大学アウティング事件がテレビや新聞では大々的に報道されなかった事実を挙げるとともに、この事件の背景には、いじめ加害者に、ゲイというセクシュアリティをネタとして扱ってもよいという認識があったのではないか、さらにこの認識は、メディアによ

って作り出された風潮が影響しているのではないかと考察しました。

日本では、(1) ＬＧＢＴのタレント＝オネエタレントの傾向が強い、(2)「ゲイ＝オネエ」という偏向イメージを作り出している、(3) ＬＧＢＴが娯楽として消費されている、(4) 芸能人のセクシュアリティに過剰反応する傾向がある、(5) ＬＧＢＴを正しく伝える意識が弱い、(6) 笑いのネタにならないような事柄（いじめや自殺）にはあまり触れない、というメディアの現状があるということです。

次に、ＬＧＢＴの人たちは困っている、かわいそうな人として取り上げられる事例を２つ取り上げました。１つは朝日新聞に掲載された「ＬＧＢＴらに優しいトイレ 東京五輪に向け 都が計画」との記事で、もう１つはフジテレビの「とんねるずのみなさんのおかげでした」で登場した「保毛尾田保毛男」というキャラクターに対して批判が殺到した問題です。いずれもＬＧＢＴ当事者は「周囲の方が騒いでおり、当事者は大したことではないと考えてる人も多い」と語り、それによってかえって偏見が広がることを心配する声が上がっています。すなわち、日本では当事者でない者が過剰な反応を示しすぎることで、ＬＧＢＴを特別視してしまう傾向があり、当事者を困惑させてしまっている現状があるとしました。

最後に、スウェーデンの社会的背景を通してメディアにおけるＬＧＢＴの取り上げ方を考察しました。日本のメディアでは、ＬＧＢＴを可哀想、あるいは笑いの対象としていることが分かりましたが、スウェーデンでも同様の傾向が見られるのかを検証し、その社会的背景について考察しました。

検証方法としてストックホルム大学日本語学科の学生にインタビューを行い、考察の参考としました。質問の内容と回答、考察は以下の通りです。

(1) スウェーデンではＬＧＢＴへの差別は存在するか？

→ 全員が平等である社会なので差別はないと感じる。

考察 ＬＧＢＴである、ないに関わらず全員が平等であるという意識の強さが伺える。また日本と違い、ＬＧＢＴを社会の一員として考えている。

(2) スウェーデンではＬＧＢＴは笑いの対象とされるか？

→ 子どもの頃は分別がついていないのでいじめられることもあるが、大人になるにつれてそのようないじめも無くなる。

考察 ＬＧＢＴを嘲笑すべきでないという社会的な暗黙の了解が存在している。

(3) ＬＧＢＴへのヘイトスピーチがあった場合どうなるか？

→ 発言をした人が社会的にバッシングされる。

考察 ＬＧＢＴを嘲笑すべきでないという社会的な暗黙の了解が存在している。

(4) 日本のＬＧＢＴタレントについてどう思うか？

→ マツコ・デラックスを例に挙げ、そういうコメディスタイルであり 1 人の芸人として面白いと思う。

(5) スウェーデンにＬＧＢＴタレントはいるか？

→ 直ぐには思いつかない様子。しいて言えば Jonas Gardell

以上のように、スウェーデンでは、ＬＧＢ

Ｔに対するヘイトスピーチはタブーであるとされ、ＬＧＢＴの人々の権利も守られている意識が強いことから日本のオネエタレントのようなＬＧＢＴタレントもおらず、社会の一員として見られる傾向にあることが分かりました。

日本のＬＧＢＴとメディアではオネエタレントが使われていたり、当事者でない人達がヘイトスピーチに過剰に反応していることからＬＧＢＴを無意識のうちに自分達とは異なった存在であり、社会の一員と認識していない傾向にあると言えます。

日本では周囲の人達が可哀想と騒ぐ前に当事者の気持ちに寄り添う必要性が求められます。そしてＬＧＢＴの人達が特別視されないような風潮をつくるために、メディア側はステレオタイプを誇張して報道せず、視聴者側もメディアの情報だけに捉われすぎないよう客観的に考えることが重要であると考えます。

④　「ＬＧＢＴを取り巻く生活環境－日本はスウェーデンに追いつけるか」

近年、日本ではＬＧＢＴへの興味、関心、支援が盛り上がりを見せており、多くの企業も様々な施策に取り組んでいます。しかし当事者にとっては、金融や結婚、住宅分野においてまだまだサービスが不十分であると感じているようです。私たちはこの３つの分野に特化して、日本とスウェーデンの取り組みを比較、考察しました。

結論としては、企業の自発性に委ねるのみのアプローチには限界があるという判断にいたりました。ローンの借り入れ、結婚式の挙式、住まいの確保など、生活の基本となり得る要素に関しても差別的な扱いを受けている現状を鑑みると、スウェーデンのように法で守っていく必要性を感じます。

また、スウェーデン企業を代表するＩＫＥＡへのインタビューを通じて新たな気づきを得ました。それは「インクルード」の大切さです。ＩＫＥＡではダイバーシティ＆インクルージョンという理念を一番大事にしており、ＬＧＢＴに関わらず全ての人々が平等に働けるような職場を築いています。

したがってＬＧＢＴに特化した支援制度などは特にありませんが、非常に自然に働くことができているということです。これこそが理想的な社会のありかたではないでしょうか。ただしこれは、多くの人々の理解がなければ実現できません。多くの人々がその違いを認めれば、ＬＧＢＴの人々が自然体で生きることができるはずです。したがって企業が第一にすべきことは、社内の研修などを通じて、無理解による差別をなくしていくことであると考えます。

⑤　「スウェーデンの幼児教育におけるジェンダーニュートラル教育－日本への導入可能性」

スウェーデンの幼稚園 Egalia で実践されているジェンダーニュートラル教育学は、固定的な価値観ではなく、性別や性的嗜好に関係なく多様な価値観を身につけ伸ばしていくことを目的としています。私たちは、この教育学を日本にも導入することが可能なのかどうかについて検討しました。その結果、日本国内の現状を踏まえると導入は厳しいという結論に至りました。その理由について、保育園、幼稚園、国の教育政策の

３つの側面から考察しました。その中で、保守的な日本と、柔軟なスウェーデンという対比が見えてきました。日本では、大変なことを美徳とする保育園事情や、伝統を重んじ、男らしさ・女らしさを重要な要素とする私立小学校お受験、さらにジェンダーニュートラルという考え方に対して懐疑的な政府の姿勢など、様々な面で保守的で、新しいことには消極的になりがちです。一方スウェーデンは、フロンティア精神をもって新しいことを取り入れることを厭わず、実践後に方向修正を重ねて良い形にしていこうとします。日本も、新しい文化や慣習を受容し実践する姿勢をもち、選択肢の一つとしてジェンダーニュートラル教育学を取り入れてみるのも、良いのではないでしょうか。

［文章は講演者が執筆、
編集校正は鈴木賢志による］

【2018 年 2 月研究講座】
カール・ラーション・ゴーデン　スタッフ来日講演会

今回はカール・ラーション・ゴーデンのクリスティーナ・ヨンソン館長と、カロリーネ・エドマン学芸員にお話しして頂きました。

＜カール・ラーション・ゴーデン＞

カール・ラーション・ゴーデンとは、スウェーデンの画家カール・ラーション（1853－1919）と家族がかつて暮らしていた家で、スウェーデンのダーラナ地方の小さな町スンドボーンにあります。元は小さな小屋でしたが、家族の増加に合わせて 1880 年から 1912 年の間に増改築を重ね、カーリンが亡くなった 1928 年当時のまま残されています。カールは自身の死後も家が長く残ることを願っていたため、カールと妻のカーリンの間に産まれた子供７人を始めとする歴代 200 人を超える相続人により、カールが住んでいた当時の大きさで維持され、1946 年に設立された遺族会によって、カール・ラーション・ゴーデンは記念館として運営されています。現在では記念館という文化遺産に留まらず、親族の集まりとしても実際に使われています。

この家は、様々な芸術様式や新しい物と古い物が調和し、家の中は明るく美しく快適で経済的な造りであるため、誰でも親しみやすい空間となっています。カール夫妻は実用的かつアーティスティックな家づくりに力を入れ、特に当時イギリスで流行していた赤と緑の組み合わせをインテリアとエクステリアに使うなど、イギリスに端を発したアーツ・アンド・クラフツ運動の影響を色濃く受けています。このユニークで愛溢れる理想的な家を築くことは、カール自

身の辛く貧しかった幼少年時代の生活が影響していると言われています。

＜生活に合わせて増改築し、進化する家＞

玄関から入ってすぐ右の部屋は、当初カールのアトリエとして使われていました。ドアにはカーリンのポートレイトが掛けられており、これは仕事をしている間にも大好きなカーリンに見つめられたいという想いでカールが描いたものです。作品が小さかった頃はこの初めのアトリエで間に合っていましたが、大作の発注を受けるようになると手狭になり、大きいアトリエを増築したことで、この部屋は子供の作業部屋となりました。

カールの少年時代に馴染みのある物や、母ヨハンナの若かった頃の肖像画、カールと７人の子供達が洗礼を受けた鉢、カーリンが画学生時代に描いた絵やカーリンの師匠の絵が飾られている長廊下を過ぎると、小さなアトリエの次に作られた大きなアトリエがあります。1899 年の大晦日に当時のスウェーデンで最大のアトリエの増築に着手し、屋敷の面積はそれまでの２倍になりました。このアトリエは仕事だけでなくクリスマスなどのパーティーに使われ、現在も大広間として使われています。部屋の壁には、1901 年のニューベーレン礼拝式のフレスコ画が製作され、洗礼を受ける若者を見る人たちは全員ラーション一家や近所の人など、実在の人物が描かれています。当時、日本の物を置くインテリアが流行していたこともあり、壁画の前に置かれた屏風のような物や家紋帳を真似て刺繍をしたテーブルクロスなど、このアトリエには日本芸術や文化への関心を反映する品物があります。部屋にはカーリンのデザインしたアバンギャルドなロッキングチェアがありますが、この椅子はカーリンの芸術的な表現がカールとは離れて行ったことを表しています。この時期からカールはますます保守的になり、当時の流行っていた芸術とは一線を画する傾向になりました。

1901 年の増改築時には、屋根裏部屋を読書室としてリフォームしました。少年時代のカールの家庭は貧しく、十分な教育を受けることが出来なかったため、カールは生涯学ばなければならないと考えていました。沢山の書籍と心地の良い椅子、そして落ち着ける空間のおかげか、長年の間に多くの知識を身につけ、カールとカーリンは色々な言語を話せるようになりました。そのため、カール夫妻の交友関係は広く、世界中に友人がいました。友人が訪問した際に寝泊まりするゲストルームもユニークです。壁に付けられたコペンハーゲンで買ってきた亀板の扉を開けると、押入れのような小さなスペースの中にゲスト用ベッドと、簡易的な洗面器と水差しが置いてあります。ドアには泊まった有名人のサインが書かれてあり、画家としても名を馳せたエウシェン王子や、女性初のノーベル文学賞作家のセルマ・ラーゲルレーヴも宿泊しました。

1912 年には、最後の増改築時にベリマンの小屋が付けられました。この小屋は 1742 年に銅産業で出世したファーレンの街富豪の小屋で、壊される寸前にカールがもったいないと思い、丸ごと移動させて来たものです。カールが逝去する数日前に本を書き終えたという感慨深い部屋でもあります。

＜新しい物と古い物、近所の物と海外の物が融合する家＞

カール夫妻は新しい物が好きでしたが、古い物を収集し、奇抜な色で塗り替えテキスタイルを張るなどして、遊び心のある日常使いの品物として生まれ変えることを好んでいました。1600 年代の肘掛け椅子は鮮やかな青に塗られ、カールがデザインしたと思われる絵柄をカーリンがこしらえたゴブラ織りの布が張られました。壊されてタイルだけになった暖炉は、カールが拾い集め、左官や大工の手を借りて新たな暖炉として部屋に据え付けられました。ソファーにはひまわりの花のクッションや、テーブルの上にかけられたカーリンが刺繍した家系図を表すクロスなど、世界が成り立つ四元素である、土・空気・水・火の要素を取り入れています。そして 1700 年代の雰囲気を出すために、1700 年代当時スウェーデンでポピュラーだった中国のガラス製品が壁にかけられています。

さらにカール夫妻が美術留学中に滞在していた国際的芸術画家コロニーで出会った日本文化の影響も反映されています。パリの日本人美術商・林忠正から購入したと考えられる小原古邨や歌川国貞、菊川英山、東洲斎写楽の浮世絵や、能の面、刀、鷺の置物、男女の日本人形が飾られています。カールは最初の画集に「日本は芸術家としての私のふるさとである」と書いているように、日本文化への関心は部屋の中にも表れており、多様な時代や様式などが混ざり合い、カール夫妻の美的センスにより完璧に融合されています。

＜カーリンの才能を発揮させる家＞

妻カーリン・ベリューも若い頃からフランス語や芸術を学び、フランス留学に行かせてもらうなど、当時の女性では大変進んだ人でした。1883 年の結婚後、女性の立場が弱い当時の社会背景のもとで、カーリンは絵を描く事はありませんでしたが、絵の代わりに刺繍に没頭しました。

赤と白で統一されたカールの寝室に置かれたベッドに付けられた天蓋はカーリンが刺繍し、ベッドカバーに掛けられた毛布は、カーリンが考案したスンドボーン毛布です。現在はどこの家にもある柄の毛布となりましたが、当時はあまりにモダンで、カーリンが近所の人に自由に絵柄を使うことを許していても誰も使っていませんでした。

カーリンと娘たちの部屋にあるカーテンもカーリンが織った物で、愛の象徴であるハートが助けを借りて、悪の象徴である蛇に追われながらも力強く太陽に向かって伸びて咲く蓮の花を表しています。そして下に引き出しが付いたベッドや、部屋の邪魔にならず全ての花に太陽が当たるよう設計された階段状の花壇など、カーリンは使い勝手の良い実用的な家具もデザインしました。この部屋は空間を広く取るために天井板を外し、屋根裏の部分を白に塗り変えられました。当時、白色の壁は貧乏人の家や病院の部屋、刑務所に多く見られていたため、あまり好まれていませんでした。このことからも、カール夫婦がいかにモダンで常識にとらわれていなかったかが分かります。

このように、カーリンは与えられた環境で才能を活かし、類い稀なる芸術的色彩的感覚を織物や刺繍、家具のデザインで発揮しました。このカーリンの芸術的センスにはカールも敬意を称していたようです。

カール・ラーション・ゴーデンでは、カールの貧しい少年期では叶えられなかった夢や、カール夫妻の芸術的センスと実用的な考え、様々な文化への興味関心が詰め込まれています。そして、お互いの才能を尊敬し合う夫婦の形や、日常の中にも芸術や創造性を欠かさない芸術家としての生き方を垣間見ることができます。ぜひカール・ラーション・ゴーデンを訪問し、ショップで販売されているカーリンの刺繍キットを手に入れ、家の一部をカール・ラーション・ゴーデン化してみてはいかがでしょうか。

［記録者：
明治大学国際学部３年　香川　優子］

【2018 年 3 月研究講座】
目からウロコの大人の修学旅行　帰国報告会

冒頭の挨拶：植木秀子さん

＜どうしてスウェーデンに行ったのか＞

植木さんは、東日本大震災発生時、福島県いわき市に住んでおり、地震発生後しばらくは福島県に留まっていた。しかし、その後、度重なる余震のために、東京に自主避難をした。そこで、スウェーデン大使館が被災者をパーティーに招待しており、植木さんはそれに参加した。そこで、当時スウェーデン社会研究所の所長であった、故須永昌博さんとの出会いが、スウェーデンを知るきっかけになった。植木さんは、１カ月に１

度、スウェーデンについての勉強会に参加し、スウェーデンの様々なことを学んだ。中でも特に心に残っているのは、再生可能エネルギーについての講義。植木さんご自身も、活動拠点であるいわき市で、このお話を是非広めたいと思い、講演会を行った。そして、2012 年 2 月、実際にスウェーデンを初めて訪れた。そこで、「この地にまた訪れたい」と誓った。そして、7 年経った 2018 年 2 月に、ようやく、目からウロコの【大人の修学旅行】という形で夢が叶えられた。

＜大人の修学旅行　参加者による発表＞

1. 須永洋子さん（本研究所理事・故須永昌博前所長のパートナー）

「この旅の参加理由と女性の社会進出環境と介護　～友人を訪れて～」

東日本大震災後に、被災者を招いたパーティーで出会ったことが、植木さんとの交流の始まりであった。

今回の旅行では、友人のもとを訪ねた。スウェーデンの女性はフットワークがとても軽いこと、スウェーデンの空気がきれいであるということを、今回あらためて感じた。

2. 佐藤正美さん（東日本大震災の被災者・ＮＰＯを手伝う縁の下の力持ち）

「スウェーデンの信号機」

今回が初の海外旅行だった。歩行者用と自転車用の信号機があることに驚き、なんて人に優しいところなのだろうと感じた。スウェーデンが平等と言われることに、なるほど、と思った。

3. 藤田宏子さん

「フィーカしましょ！」～見て聞いて感じたこと～

藤田さんは、埼玉で国際交流についての企画支援を行っており、国際交流のため、この旅行に参加。

今回は、ウプサラにお住いのご家族からお話を聞き、「ヒント」をもらった。

▼ スウェーデンの税金の使い方に驚き

外国人でも、スウェーデン語ができれば

国家資格がなくても医者になれる。

実際に、ウプサラでも多くの外国人が医者として活躍中。

▼ スウェーデンの男性は当たり前に家事をする

▼ 若者の収入について

手取りは日本より少し多い。年金や老後など、将来の負担を気にせず、今の自分のためにお金を使えるのは素晴らしいと感じた。

スウェーデンも昔は今と全然違う。

今日のスウェーデンがあるのは、地域の方の声を汲み取ってきたからだと感じた。

フィーカという文化の大切さを強く実感。スウェーデンでは選挙投票率が 86%と高いが、日本でも、「どのような教育をしていけば良いのか」などについて、気軽に話し合えるような、世の中が身近になる環境をつくりたい。

4. 石渡のぞみさん

「教育と福祉の充実が実現している国！スウェーデンは税金の使い方が日本と大きく違っていた!!」

子供が３人（２２歳、２０歳、１８歳） と、介護が必要な高齢の家族を、不安定な収入で養わなければならない苦労を日々実感し、この環境を変えたいと思っていた。また、保育士を目指している娘の香さん（１８歳）にスウェーデンの教育を学ばせたいという思いがあり、旅行に参加した。

【スウェーデンの教育投資について】

スウェーデンでは義務教育が無料。教育にどれだけお金をかけるのか、というのは考え方の違いだと感じた。

【スウェーデンの教育の特徴】

スウェーデンのプレスクールを訪れ、４つの特徴を発見した。

① 小さなころから民主主義を教える

② 個性を尊重することを教える

③ 自発性の引き出し方

④ １日最低１回外に出て遊ぶ

元国会議員の方（アン・クリスティーナさん）のお話を聞いて、庶民が政治に関わることで、社会は変わると感じた。

これからは、ご近所の方とも、教育などについて気軽に話し合っていきたい。

5. 石渡　香さん

「スウェーデンの教育方法を見て、保育士の立場になった時に活かしたい」

【スウェーデンの教育方法について驚いたこと】（プレスクールを訪問）

▼ 小さな頃から、今日は何をして遊ぶかを自分たちで話し合って決める

⇒ 誰かに決めてもらうのではなく、自分の意志で決める力が養われる。

▼ やることの趣旨が日本と異なる

例：「環境問題に触れる」目的もあり、外で遊ばせる

⇒ 環境問題に自然と関心が持てるようになる。

同じ夢(保育士)を持つ仲間に、スウェーデンのプレスクールで学んだことを広めたい。

6. 荻久保　則男さん

「母からはじまる民主主義」

今回の旅行の目的は、第１に「民主主義を学ぶ」、第２に「体内記憶をスウェーデンにも広めたい」ということであった。

荻久保さんは、映画「かみさまとのやくそく」の監督を務めている。

体内記憶とは…赤ちゃんがお母さんのおなかの中にいる時に、お母さんの感情が赤ちゃんに影響し、それが記憶として残ること。例えば、妊娠期間中、母親が穏やかでいられれば、出産後、子と母の関係も良くなる。

民主主義とは何か、とアンさんやご主人に尋ねた時の返事が特に印象に残っている。

アンさん：「すべての人が対等で、平等の権利を持っていること」

アンさんのご主人：「女と男が平等であること」

7. 中川伸二さん

「スウェーデンのプレスクール教育を通して見えた再生可能エネルギーの導入及び拡大」

福井市在住。故郷である福井を持続発展可能な街にすることが最終目標である。

今回は、持続発展可能な社会づくりのお手本を、スウェーデンで見つけることを目的に参加した。

公共交通機関にガスが使われていることに驚いた。

国会見学及び市会議員と元国会議員との交流を通じて、問題解決を目指す多彩なアイデアが、国民の前にガラス張りで、かつ数字を交えて掲示され、それがディベートを通じて切磋琢磨されていると知らされ、驚いた。

民主主義の原点は「男女平等」でありそれが全てだ、という意見を聞き驚いた。

幼稚園の目的は、民主主義を教えることだと断言され、教育指導要領にしっかり記載されていると知らされたことには、一番驚いた。

8. 木村雅代さん

「楡の木を守る運動」

【楡の木を守る運動とは】

1971 年 5 月、ストックホルムの中心部にある王立公園に、地下鉄駅への出入り口をつくるため、13 本の楡の木を切り倒すことが決まっていた。これに対して、数千人の住人が反発し、１週間にわたって木の周辺を占領した。これを受けて、市は、ある晩、警察を用いて強制退去を行い、実力行使で木を切り倒そうとし、警察と住人の双方に怪我人がでる事態となった。その後、市は、木を切り倒して出入り口をつくる計画を撤回し、地下鉄の出口の位置をずらすことで問題は解決した。

【楡の木を守る運動について驚いたこと】

▼ 市民が起こした行動で、環境活動として身を結ぶことがある。市民レベルで、環境保護の概念が根付いている。そして、勝利を得たのは、政府ではなく住民だったことに驚いた。

▼ 今にも受け継がれているということ。現在も、オブジェが環境保護の概念として残っている。当時、この運動に参加していた住人の中から数名、現在のスウェーデン環境省のメンバーになっている人がいる。

日本には、実害が自分に及ぶ、という考えが浸透していないと感じる。

一時的な流行ではなく、継続して関心を持つためには、人間も環境の一部である、ということを学ぶ教育が大事だと、スウェーデンに行き強く感じた。

9. 金子初音さん

「私が知る民主主義は本物じゃなかった」

横須賀でシンガーソングライター/ラジオパーソナリティをしている。

【民主主義について】

日本政府は、選挙投票率の低さの一因を、

「当日の天候の悪さ」と報道した。

金子さんは、日本の投票率が低い要因に関わることとして、女性の投票率に言及。

スウェーデンでは、国会議員のうち、４４％は女性だが、日本の女性議員は、わずか１３％で、これは世界で１４２位。日本では女性議員が少ないことで、女性の声が届かない、と多くの女性が感じていると思われ、これが投票率の低い一因ではないかと思う。

プレスクールを訪れ、お話を聞いて、「日本をどのような国にしたいか」を子供たち自身に考えさせることを、これからしていきたいと感じた。

スウェーデンから帰国後すぐに東北を訪れた。被災した陸前高田市の住民に、震災直後からどのように生活が変化したか、と質問したが、「国会が予算を決めるから、自分たちが何を言っても変わらない」と住民の方は答えた。これを聞いて、近所の議員さんに悩みを気軽に話せるような国にしたいと思った。そうすれば、近所の議員さんを通じて、国会議員にも意見がくみ取られていくと思う。

10. 大谷未来さん

「『世界は変わる』と思った日～スウェーデンで耳にしたことばより～」

【自分を生きる】

スウェーデンで暮らす人々の生き生きとした姿に感動した。

バイオマスガス工場で働く人の言葉「社会の変化をおこすのは『ひとびと』です。」

【社会の仕組みを変えるにはどうすればいい？】

「ひと」の大切さを強調したい。仕組みを変えるのも大事だけど、ひとが１番大事。スウェーデンも日本も、教育のハウツーは同じだが、そこで働く人の志が全く違う。

ひとりひとり、自分を生きれば、社会は変わる！

11. 植木春実さん

「自立するということ」

プレスクールを視察して、スウェーデンでは、小さな頃から、自立するための教育がなされていることに気がついた。今回は、プレスクールでの気づきを、絵に書いて表現した。

左：幼児が自分の背丈程の段ボールを、自分でゴミ捨て場に運ぶ様子

中：おむつ代に自分で登り、おむつを替えてもらう様子。階段には、番号の書かれたボールが置かれており、数字も自然に学ぶことができる

右：山手線のホームドア

スウェーデンでは、自立の精神がプレスクールの頃から育まれている。

それに比べて日本では、山手線のホームドアなど、様々な設備や環境は充実しているが、自立の精神から考えると親切すぎるのではないかと感じた。日本という素敵な国に住んでいるのに、自殺率は高く、国民１人１人の幸福度が高くないのは違和感がある。

12. 植木秀子さん（旅行の企画・主催者）
「人と人とのご縁が繋ぐイノベーション」
（故須永昌博氏の言葉より）

【スウェーデンの国会議員の原発視察】

東日本大震災後の 2013 年 9 月、福井県の原発の視察に、スウェーデンの国会議員が訪れた。時差の関係で、視察日を１日勘違いしてしまっていたスウェーデン国会議員の方々は、植木さんと会って、まず謝ってくれた。国会議員であることを感じさせない、フレンドリーな態度に本当に驚いた。また、車に乗って移動する際も、狭い後部座席に、数人でつめて座るなど、庶民と変わらない目線で、当たり前のように過ごしていることに驚いた。

【トイレをみて気がついた、スウェーデンと日本の違い】

スウェーデンのトイレは、流すボタンがとても大きく、ボタンも１つしかないので分かりやすい。それに対し、日本のトイレは、流すボタンがどこにあるのかわからないほど、たくさんの小さなボタンがあり、複雑で細かすぎる。

これからは、スウェーデンのように、シンプルに情報公開できる社会にしていこう。

＜質疑応答＞

Q.「山手線のホームドア」についてのお話を聞いて、スウェーデンだったら、もし駅のホームに、盲目の方がいることに気づいたら、誰かが声をかけるので、ホームドアがなくても、盲目の方などがホームから落ちたりすることはないと思う。日本とスウェーデンは、「自立」ということが、根本的に違うと思う。（ホームドア設置後にも、高田馬場駅でのホーム落下事故が多発したことなどを踏まえると）日本のホームドアなど、どれだけ設備が充実しているかが重要なのではないと感じる。改めて、植木春実さんの意見を聞きたい。

A. スウェーデンでは、まず自分の意見を発信して、相手の意見も聞き入れ、その後合意に持っていく、ということが当たり前に行われている。日本にも、自立をしながらも他人と助け合う精神が根付けば良いと思う。

Q. 原発の視察の際に、スウェーデンの国会議員に謝られ、驚いたということに、強い印象を受けた。本来、謝ることは当たり前のことだと思う。それが、日本の国会議員や政治家は、何か悪いことをした時も、謝らない人が少なくないように感じる。

このことについて、改めて植木秀子さん

はどう考えますか。

Ａ．日本に必要なことは、庶民の人々の声を汲み取ること。そのために、庶民の人々自身が、どんなに些細なことでも、意見を発信していくことが必要だと思う。「自分たちの国をどういう国にしたいか」というイメージをひとりひとり持つことが大事。

スウェーデンのように、みんなでフィーカして、話し合えば良い。

スウェーデンも様々な問題を抱えているが、どのように解決するかを懸命に考えて実践している。

まずは、①スウェーデンを知る、②日本がおかしい、ということを、知ることから始めよう。そして、些細なことからみんなで話し合っていきましょう。

［記録者：
明治大学国際学部２年　本宮沙都］

【書評】『スウェーデン－日本　150 年の友情と協力』
バート・エドストロム著、児玉千晶　訳、川崎一彦　監訳

当たり前のことですが、私たち日本人が学ぶ日本の外交史は、常に日本の立場から世界との関係をとらえています。したがって、戦国時代のキリスト教伝来しかり、幕末の黒船来航しかり、外からやってくるものに対して、当時の日本人がどのように対応したのかについては、私たちは比較的よく知っています。

ところが、そんな日本が世界からどう見られていたのか、ということを知る機会はあまり多くありません。ましてや北欧の人々が日本をどう見ていたのかということを知る日本人は、かなり少ないでしょう。

本書には、そんな私たちの目を開かせてくれる興味深い記述がたくさんあります。たとえば江戸時代の日本に滞在し、日本に関する著作を遺したスウェーデン人、カール・ペーテル・ツゥンベリについて本書は「他の多くの西洋人たちがしたような、日本を奇妙な、あるいは不快な国として見ることはしなかった。ただ彼の知っている西洋とは異なっているだけで、日本人を対等に扱って述べている」と記しています。また明治時代の初めに日本に寄港し、天皇に謁見したスウェーデン人探検家のアドルフ・エーリク・ノーデンショルドは、その探検記に「あの素晴らしい、愛すべき、もてなしの民の日本人から、そしてその香しい自然から引き放されてまだ数日しか経っていないのに感じるこの苦しさに」と記していることが紹介されています。スウェーデンを代表する芸術家であるカール・ラーションが、日本の絵画を愛し、強い影響を受けたと言われていたことは知っていましたが、彼が自叙伝の中で「日本は僕の母国だ」と語っていたことは、本書で初めて知りました。

ところで、当研究所が設立されたのは、日本とスウェーデンが翌年に国交 100 年を迎えようとしていた 1967 年のことです。そこからの 50 年の日本とスウェーデンの交流の歴史において、当研究所が果たしてきた役割は決して小さくないものと考えています。設立当初の頃とは異なり、いまやスウェーデンには誰でも気軽に旅行できるし、インターネットを探れば、スウェーデンの情報はいくらでも入手することができる時代ですので、かつてのようにスウェーデンの研究を一手に引き受けるような活動はのぞむべくもありませんが、活動の範囲は小さくても、受け継いだ灯をしっかりとたやさぬようにしていくことが、今の日本とスウェーデンの関係の発展に携わる私たちの使命であると考えています。

［解説：一般社団法人スウェーデン社会研究所　代表理事・所長　鈴木　賢志］